

## 第11回群馬緩和医療研究会

日 時：2005年3月5日(土)

場 所：群馬会館

世話人：堀内 龍也(群馬県病院薬剤師会)

星野 輝久(群馬県薬剤師会)

### 1. 当院における麻薬の使用実態調査

三島八重子, 對比地絢子, 須藤 洋行  
福島 香子, 銀杏麻維子, 伊藤 理恵  
齋藤 妙子, 橋場 尚子, 小池 礼子  
佐藤ひろみ, 岩佐 博之

(群馬県立がんセンター・薬剤部)

【目的】 癌性疼痛緩和のために使用されている麻薬の使用状況調査を行ない、適正使用について検討した。

【対象】 平成16年4月から10月までの7ヶ月間に死亡が確認されたがん登録患者で、麻薬を使用していた152例。【結果】 152例中、注射剤のみを使用している患者は50例であった。内服・パッチ使用102例で麻薬の第一選択薬はオキシコンチンで、41%を占めていた。デュロテップ使用患者のうち、58%が注射剤を併用していた。【結論】 各種薬剤の導入により、オピオイドの切り替えは、概ね良好に行なわれている。

### 2. 群馬大学病院におけるオピオイド製剤の使用状況

—NSAIDsの併用状況および、フェンタニルパッチへの変更時に用いる換算比に関する検討—

小川 淳司, 飯塚 恵子, 関塚 雅之  
山本康次郎, 堀内 龍也

(群馬大医・附属病院・薬剤部)

我々は、緩和ケアチームで活動する薬剤師の資質向上に寄与することを目的に群馬大学病院における年間オピオイド使用量の推移、オピオイドとNSAIDs併用の現状及び、オピオイドローテーションの妥当性を調べた。モルヒネ換算の年間オピオイド使用量は、1982年16g、1992年527g、2004年1547gと増加していた。22年間で約100倍になっていた。NSAIDs併用状況(2003.10~2004.9)は、ロキソプロフェンNa 258/511件、ジクロフェナクNa 13/511件、エトドラク 42/511件、麻薬単独処方 73/511件であり、NSAIDsは頓用が多かった。フェンタニルパッチへの処方変更は72/511件であった。他のオピオイドからフェンタニルパッチへの変更時換算150:1で計算しても鎮痛効果が不十分と思われる処方変

更が2件あった。Grond Sらが報告している換算比75:1で比べると27件が変更当初で効果不十分と考えられた。オピオイドの使用量は、使い勝手が良い徐放性製剤の採用を機に使用量が上昇したと考えられる。NSAIDsの併用は、ほとんどが頓用指示であったが、NSAIDsの有効性から継続的な併用がもっと多くても良いのではないかと考える。オピオイドローテーションにおいて、変更当初に十分な鎮痛効果が得られなかったと考えられる症例が2例あり、薬剤師は群馬大学病院の緩和ケアチームの一員として鎮痛補助薬の特性やオピオイドローテーションを熟知し、疼痛緩和治療に積極的な関与が必要と考える。

### 3. 泌尿器科病棟における疼痛緩和ケアへの薬剤師の関わり

茂木 久実, 加藤 敬子

(館林厚生病院・薬剤部)

中村 敏之

(同泌尿器科)

今回、薬剤師が関与し十分に患者と家族の声を聴くことでPain controlを行うことが出来た一例について報告する。65歳男性、前立腺癌。骨転移による右上腕痛と痺れによりPain control開始となる。Pain control開始時には服薬指導を行い、十分な理解を得てから患者の変化を観察していった。さらに、十分なコミュニケーションをとることでPain controlの向上につながっていった。また、回診やカンファレンスの実施等により、医療スタッフ間の情報提供がスムーズに行える状態にあった為、患者の訴えを薬剤師の立場として処方に反映できたと考えられる。今回の経験から、患者の訴えを十分に理解し、日頃から医療スタッフ間でコミュニケーションをよくとることが不可欠であると実感した。

### 4. 看護師外来を開設して

青木 純子, 増谷 悦子, 中村 敏之

(館林厚生病院泌尿器科)

当外来では大多数の患者、家族に癌告知をしている。

一般外来でその患者を支えることは容易な事ではない。医師の説明後の患者、家族のやりきれない思いや不安を受け止められる事を目的として今回看護師外来を開設した。その結果患者から「冷静になれる時間ができた」「医師には直接言えない事も聞けた」等の良い評価を受ける事ができた。この事から患者を支えられる存在でいられたことに、専門性を感じ喜びを感じた。また告知したら終わりではなく、その後からより深い関わりが始まる。その為には看護師単独でなく、医師・薬剤師等の他職種とチームとして関わる事でより専門性かつ質の高いケアを提供することを目指したい。

#### 5. 大学病院における緩和ケアチームによる取り組み

一患者・家族の満足を目指す1事例を通して一

石田 和子, 須川美枝子, 井上エリ子  
伊藤 桂子, 前田三枝子, 三國 雅彦  
田村 遵一, 井田 逸郎, 米村 公江  
小幡 英章, 伊藤奈緒美, 中山 優子  
堤 莊一, 堀口 淳, 斉藤 貴之  
小川 淳司, 飯塚 恵子, 中林 正美  
関上 里子, 柳澤 健 (群馬大医・  
附属病院・緩和ケアワーキンググループ)

【目的】 当院は2004年4月より医師、薬剤師、看護師などで緩和ケア診療推進委員会を結成し緩和ケアチームの発足を目指し委員会を設立した。同年10月から実際に診療科の依頼を受けてコンサルテーション活動を開始した。今回は、終末期患者への緩和ケアチームによる関わりにより患者・家族の満足を目指す事例を通して当院の取り組みを紹介する。【方法】 対象者は40歳の女性、胸腺がん術後の照射および抗がん剤治療後であり、癌性腹膜炎、癌性疼痛にて塩酸モルヒネの持続注入などで疼痛コントロール中であつた。2004年11月9日に緩和ケアチームへ、疼痛コントロールを行い外泊・便秘・気分転換活動についての依頼があつた。緩和ケアチームでは医師1名、薬剤師1名、MSW1名、看護師3名が集合し訪問前カンファレンスを行い情報収集方針を決定後依頼科へ出向いた。対象者の主治医、受け持ち看護師より状況を再度把握し、緩和ケアカンファレンスを行った。【結果】 緩和ケアチームでは、可能な限り外泊と入院を繰り返しながら患者の死の受容段階を把握した上で家族との別れの準備をすることをゴールとした。以下3点の結果を得た。1. 疼痛をコントロールしながら家族の協力を得て2回外泊できた。2. 全身の筋肉疲労がありリラクゼーション外来を受診し、家族を含めたマッサージを中心としたケアを実施した。3. 終末期患者への援助を家族と共に行えたことは、患者・家族の満足感を高める援助になった。【結論】 大学病院で緩和ケア

チームへの取り組みの効果が期待できる結果となった。まだ、緩和ケアチームの活動の第1歩であり、さらに事例を積み重ねシステム化して行きたい。

#### 6. 在宅療養への不安をもつ患者と家族への看護

森 千沙子, 大島佐都子, 植木 美賀  
田島由美子, 細野美代子, 金子由美子

(群馬大医・附属病院北6階病棟)

【はじめに】 今回、当院において不安が強く、在宅への受け入れが難しい患者A氏が家族の援助や多職種のサポートにより、1ヶ月半在宅で過ごすことができた。そこで、A氏とその家族の在宅療養移行までの過程をふりかえり、報告する。【事例紹介】 患者：A氏 女性 60歳 左乳癌、多発転移。H16年5月左鎖骨上リンパ節腫増大による反回神経麻痺出現し、胃ろうの造設と気管切開を施行。家族構成：夫と二人暮らし、キーパーソンは長男【経過】 A氏は呼吸苦から死への危機感を持ち、経口摂取できない状況に不安を募らせていった。状態が落ち着いたあとも、不安が強く、体力がつくまで入院していたいと考えていた。医師より病状と今後の方針について説明を受ける。夫は転院を希望し、息子は本人の希望にそうようにしたいと話していた。医師、看護師、MSW、薬剤師、A氏、家族で、今後どのように過ごすことが望ましいか、何度も話し合いをもち、退院の方向で考えたいという気持ちが聞かれるようになった。退院の日程を設定し、在宅ケアの指導を行った本人は長男夫婦への指導を希望した。その希望を尊重し、長男夫婦に指導を行なった。長男夫婦は、技術を習得し、在宅への自信を深め、本人は自宅にいるかのように穏やかに過ごし退院となった。【考察】 ・患者の心理過程に合わせた適切な看護援助が必要である。・家族への指導と在宅をイメージできる環境づくりをしたことが退院への自信を深めることにつながった。・患者をとりまくサポート体制を整えることは、在宅療養への移行に有効である。

#### 7. 癌終末期患者の在宅療養にむけてのアプローチ

一在宅で死を迎えた症例を通して一

五十嵐美幸, 奈良 智美, 中山麻希子  
安部美和子, 中村小枝子

(伊勢崎市民病院9A病棟)

樋口 清一 (同内科)

癌患者の死亡場所は、90%以上が病院をはじめとした医療施設である。一方、国民調査結果によると、国民の過半数は終末期状態になった場合、在宅療養を望んでおり、理想や希望と、現実の間には大きな隔たりが存在している。この原因の一つとして、癌終末期患者・家族の多くは、漠然とした不安と様々な葛藤を抱いており、在宅療養に